



ブリヂストンが贈ったサンダルを履く避難民キャンプの子どもたち。サンダルは足をけがから守り、破傷風などの感染症も防ぐ

使い終えたタイヤで 国際貢献!

2010年1月12日、中南米・カリブの国、ハイチをマグニチュード7.0の大地震が襲った。死者20万人以上という未曾有の被害をもたらし、今も多くの人々が住みなれた自宅を追われ、避難民キャンプでの不安定な生活を余儀なくされている。

最大の被害を受けた首都ポルト・フランスの郊外に位置するカルフル地区。その一角に、びっしりと青や白のビニール製テントが立ち並ぶ避難民キャンプがある。10月のある日、キャンプの中央広場で、大勢の子どもたちが何やらうれしそうに列を作り、自分の番を今か今かと待っていた。



国際協力の担い手たち

ブリヂストンFVS株式会社

子どもたちの足を守る 「タイヤ館」のサンダル

「被災地の子どもたちに、使い終えたタイヤで作ったサンダルを贈ろう」世界を代表するタイヤメーカー、ブリヂストンが、大地震で履物を奪われた子どもたちに、サンダルとたくさんの笑顔を届けている。



「あなたのクルマに、エコタイヤを。世界の子どもに、サンダルを。」タイヤ館で紹介される「エコピア・サンダル・プログラム」。子どもたちが応募したデザイン案も展示するなど、各店舗がディスプレイに工夫を凝らしていた



インドネシア・スマトラ島

国内市販用タイヤのフランチャイズチェーンとして展開する「タイヤ館」で行っているプロジェクトだ。

大地震で履物を奪われた子どもたちに、サンダルとたくさんの笑顔を届けている。

日本の子どもがデザインし、使い終えたタイヤを活用して作ったサンダル。2010年10月には、ハイチ・カルフル地区の避難民キャンプ計9カ所で、いまだに避難生活を送る子どもたちに5,000足のサンダルを配った



足を守ることはもちろんだが、暑い気候の途上国の被災地では、支援物資の一つとしてサンダルも好まれる

「大事に使ってね」「ありがとう!」

NPO法人ADRA Japanのスタッフ・鈴木泰生さんが手渡ししているのは、おしゃべりなカラフルなゴム製サンダル。「履き心地がいいね!」。お目当てのものを手に入れ、皆うれしそうに走り回っている。

実はこのサンダル、使い終えたタイヤをリサイクルして作られたもの。ブリヂストンのフランチャイズチェーン「タイヤ館」が、低燃費で知られる環境タイヤ「ECOPIA」の売り上げの一部を使って製作した。小売店の命題でもある「集客力の向上」と、CSR(企業の社会的責任)の一環としての「社会貢献」。この2つを両立させたかったタイヤ館が、使い終えたタイヤで社会に貢献できることはないか



使い終えたタイヤを活用したサンダルの製造の様子

と考へ、世界の被災地にサンダルを送る「エコピア・サンダル・プログラム」が生まれた。

「私たちの提供するリサイクルサンダルが、きつと現地で役に立つ、そう考えました」と話すのは、タイヤ館のチーフ本部であるブリヂストンFVS・FCチーフン運営部の潮田隆太さんと青山梨音さん。「被災地では履物をなくし、はだしで暮らす人がたくさんいると聞きました。その上、がれきやガラスの破片といった危険物も地面に多く転がっている。足をけがすれば、破傷風などの感染症を引き起こす危険性があるという話でした」。

取り組みが店舗の誇りに

そうしてスタートした「エコピア・サンダル・プログラム」。タイヤ館では、各店舗が工夫を凝らしたディスプレイなどで取り組みをアピール。「環境に優しいタイヤを選ぶことで国際貢献ができる」という新鮮なスタイルが、多くのドライバーの共感を呼んだ。また、日本各地の小学生以下の子どもたちを対象とした「エコピア・サンダルデザインコンテスト」も実施。子どもたちに自由な発想でサンダルをデザインしてもらい、応募作から選ばれた優秀作品は、実際に被災地に配布されるサンダルの絵柄となる、という企画だ。タイヤ交換の待ち時間な

どに子どもたちが気軽に参加できる企画として喜ばれ、全国から9000通近い応募があった。

プログラムを通じ、サンダルの制作を進めてきたブリヂストンFVS。2010年1月にはインドネシア・スマトラ沖地震の被災地、そして10月にはハイチ大地震の被災地へ、計1万500足を提供した。現地ではサンダルを配布したのは、世界各地の被災地支援や難民支援などで広く活動するADRA Japan。また、ハイチへの輸送時には、国際人道支援を行うNPO法人ジャパン・ブラットフォームと日本郵船グループによる、被災地支援のための物資協働輸送プロジェクトの協力を仰ぎ、現地のADRA Japanに引き渡すことができた。

潮田さんは「店舗のスタッフから、『このプログラムに参加したことで、自分たちのタイヤが被災地の子どもたちの安全と健康に役立っているという、今までにない誇り』を持ってもらうようになった」という声が多く上がりました」と意識の変化を喜ぶ。

多くの車の安全な走行を支えてきたタイヤに新たな命が吹き込まれ、被災地の子どもたちの足と健康を守っている。今年4月には、再びハイチでサンダルを配布することも決まった。子どもたちのとびきりの笑顔が、また、見られることだろう。

研修でNGOの能力向上を

被災地でサンダルの配布を担当したADRA Japan。その活躍を後押ししてきたものの一つが、組織力の向上、支援者・連携先の拡大を目的に参加したJICA地球ひろばの「組織力アップ!NGO人材育成研修」だ。その中でADRA Japanは、研修の一環で行われた「国際協力NGOによるプレゼンテーション・コンペ」で、CSRを進める企業20社を前に、各企業の特性を生かした協働企画を提案した。企業側の手ごたえを感じたADRA Japanでは、JICAのアドバイザー派遣制度を活用して専門家の指導を受け、資金調達、企業連携のノウハウを高めていった。こうしたADRA Japanの団体を挙げての着実な取り組みが、ブリヂストンという大企業との連携につながったといえる。

